

グループ活動による資料読解を通して 新たな気づきを得る中学校歴史授業

M15EP010
杉田 吏

1. はじめに - 問題の所在 -

(1) 学習指導要領から

中学校学習指導要領(2008)の歴史的分野の目標では、資料活用能力として「歴史上の人物や文化財、身近な地域の歴史などの様々な資料を活用し多面的・多角的に考え、公正に判断し、表現する」力の育成を求めている。

同時に学習指導要領では、さまざまな歴史的事象を多面的・多角的に考え、広い視野で歴史を理解していくことを求めている。そのために学習過程で、さまざまな資料を活用し、生徒により歴史の解釈の多様性を具体的に学ばせることが必要となる。そして、最終的には社会科の大きな目標である公民的資質を身につけさせ、社会に関心を持たせ、意欲的に学習する態度を身につけてさせていくことにつながる。一方で、「各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付けながら再構成する学習」や「考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことにより、お互いの考えを深めていく学習」を展開することで言語活動の充実を目指す、としている。

(2) PISA 調査から

文部科学省(2005)『読解力向上プログラム』によると、OECDによる生徒の学習到達度調査(PISA調査)では、読解力を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義している。その中で、PISA調査(2003)の結果として、我が国の生徒は「テキストの解釈、熟考・評価」に課題がある、「自由記述(論述)の設問」に課題があるという分析がなされて

いる。課題として示されたPISA型「読解力」は、社会参加等に関わることから、社会科との関連が深いといえる。

2. 研究の目的

本研究では、先述した(1)(2)で示した問題意識から、中学校歴史学習において授業の中で生徒同士が歴史的事象に関する複数の資料を活用して比較・検討するグループ活動を中心に据え、そこでの歴史資料の読解を通して生徒に新しい歴史認識に気付かせる歴史授業のあり方を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

- ・実習校…甲府市内公立中学校
- ・実習期間…2015年6月～12月(週1~2回)
- ・授業実践…対象：2年生 1クラス(27名)
日時：11月12日(木)
- ・授業内容…ペリーの来航と開国(教育出版)

授業で用いたワークシートに書かれた生徒の記述の分析から、一時間の授業の展開部分で始めに生徒の個人活動で資料を読解させ、その後グループ活動での意見交換を経て、最終的に個人活動に移った際の考えの変化や新たな気づきについて考察した。

4. 内容

(1) 先行研究から

中学校学習指導要領(2008)第2節社会の歴史的分野「3 内容の取扱い」の部分には「気付かせる」という語句が頻出する。歴史的分野における「気付かせる」という表現は、地理的分野や公民的分野と比較すると、特に多い。このことは、歴史的分野の学習において、教師が、生徒の「気づき」に留意しなければならないことを示していると考えられる。

そこで、生徒に「気付かせる」ための指導手順を図1のように整理した。

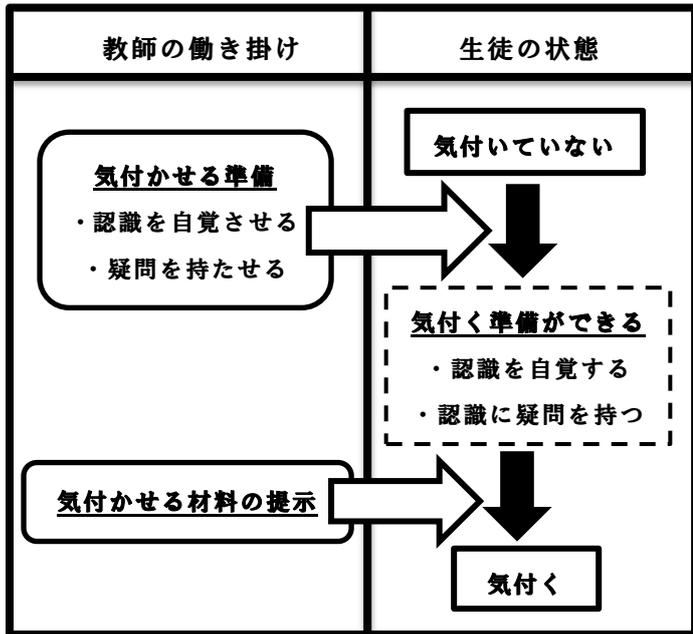


図1. 「気付かせる」ための指導手順

生徒に「気付かせる」ためには、山口（2013）によると、まず「気付くための準備をさせることが必要」であり、「自分の認識に対してある種の疑問が生じ、その疑問について考えようとしている状態にさせること（山口，2013）」が重要である。そのためには、「既習の学習内容を思い出させたり、具体的な事象を提示したりして、生徒に認識を自覚させる、または生徒の認識を揺さぶり、別の視点を与えることができる資料提示を行う（山口，2013）」ことによって、教師は生徒に認識に対する疑問をもたせる働き掛けを行わなければならないと考える。

さらに「適切な発問や資料提示、教材・教具や学習形態の工夫などによって、自覚した認識に働き掛けたり、疑問を解決するヒントを与えたりする材料を提示して気付かせる（山口，2013）」ことが考えられる。

図1のように、教師側が気付かせる準備をする働き掛けを行った上で、再度気付かせる材料を提示するという手順を踏むことで、生徒たちは気付くことができると考える。

（2）授業の展開時における「気付き」を生かした学習指導の手順

実習での授業実践において、一時間の授業の中の「展開」時での生徒の「気付き」の変化について考えた際、図1をもとに考えると図2のような学習指導の手順で考えていくことができる。

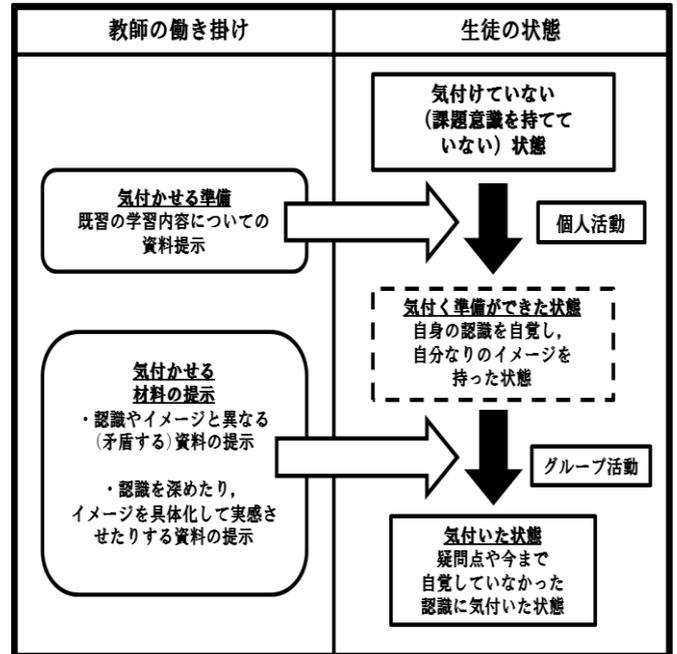


図2. 展開時の「気付き」を生かした学習指導の手順

まずは、課題意識を持っていない（気付いていない）状態の生徒に対して、教師側が既習の学習内容の復習や資料提示等を行うことによって、生徒自身の認識を自覚させたり、自分なりのイメージをもたせたりして、気付く準備をさせる。その上で、再度教師側が認識やイメージと異なる、または矛盾する資料提示を行い、疑問点や矛盾点に気付かせたり、事象を実感できるような資料を提示することにより、生徒に今まで自覚できていなかった認識に気付かせたりすることで課題意識を持たせることをねらう。

（3）社会科での「資料」の位置づけ

社会科は、社会認識を通して市民性を育む教科である。

社会科の授業では多様な種類の資料を扱う。社会科の学習において、生徒の考える力を育てるための道具の一つとして「資料」が位置

づくと考えられる。

①『特定の課題に対する調査(社会)の結果』から

『特定の課題に対する調査(社会)の結果』(図3)から、授業において「多様な資料の中から問題を発見すること」や「読み取った内容から考えること」に課題があることが指摘されている。また、問題解決的な学習の過程において、資料から問題を見出す力が十分でないということが指摘されている。

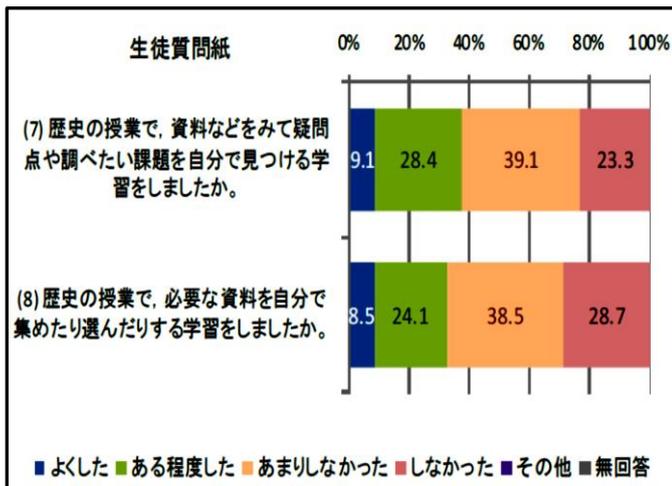


図3. 『特定の課題に関する調査(社会)』
(国立教育政策研究所 2008) より

このような結果を受けて、資料を読み取る力を育成するためには、自分の知っていることや、既習事項、友だちの考えなどと比べて考えたり、複数の資料からどのようなことがいえるかを考えたりする活動が有効であると考える。生徒にとって考え方を揺さぶるような意外性のある資料を教師が提示し、生徒自らが資料から多くの情報を取り出せるようになることが重要なことであると考えた。

②資料読解の意義

資料を読み解くことは、資料から得られる情報を取り出すことである。そして、取り出した情報をもとにして、社会的事実や事象の意味を理解することが社会科の学習である。

そして、社会科の学習をより充実させるためには、生徒たちが情報を取り出す力を育成していくことが大切である。さらには、複数

の資料を比較したり関連づけたりしながら情報を取り出すことも、生徒たちが自ら学習を進める上で求められる力であると考えられる。

そういったことから、「資料を読解すること」は、単に資料を読むことに終始するものではなく、資料を解釈・熟考し、建設的に批判しながら利用し、社会参加に生かすことを目指すものであると考えることができる。

北(2005)は、社会科の「読解力」を次のように定義している。

- ①資料に当たって、問題解決しようとする意思力
- ②資料から事実を公正かつ多面的にとらえる力
- ③事実を操作し全体的な傾向や特色を考える力
- ④学習問題を解決に導く力
- ⑤資料の限界性に気付く力

このように、資料に即して「読解力」育成を図ることが社会科の特性といえる。

(4) 社会科におけるグループ活動

グループ活動は、社会科の教科目標を達成するために非常に重要な活動である。

中学校社会科の目標である「公民的資質の基礎」という観点から、仲間の発言を聞き、新たな考えに気づき、仲間の発言内容について考えること、それらを活用して自分自身の考えを吟味することこそが社会科授業におけるグループ活動の最大の意義であると考えられる。

また、グループ活動の意義は、自分とは異なる考えや立場があることに気付いたり、自分の考えの誤りや不十分さに気付いたりすることでもある。それには、グループ活動を通して学習内容を深めることが大切である。

そのために教師は、生徒それぞれの考え・気づきの事実や理由に焦点を当て、生徒同士がお互いの考えの妥当性や公正性を吟味・検討していく場面を設定することが重要だと考える。

①歴史学習にグループ活動を取り入れる意義

社会科の中でも特に歴史学習においては、歴史事象が多様な側面を持っているため、生徒の解釈も多様になる。そのため、グループ

活動による話し合い・学び合い活動を通して、歴史事象をさまざまな角度・視点から考察することで、生徒個々の考えが裏付けられたり、これまでになかった新たな歴史認識が「気付き」として得られたりすると考えられる。

さらに、グループ活動を通して生徒が自らの解釈を再考するとともに、学習過程を振り返って自己の学びの変容を自覚することで、生徒自身の持っていた歴史認識の深まりを実感させることができると考える。

したがって、歴史学習において、グループ活動は生徒同士お互いの考えを伝え、受け止めることで、新たな見方や考え方に気付かせることに有効な学習手段だといえる。

②新たな気付きを得るための学習形態の工夫

今回、一授業時間内で行った新たな気付きを得るための学習形態の工夫は以下の図4のようになる。

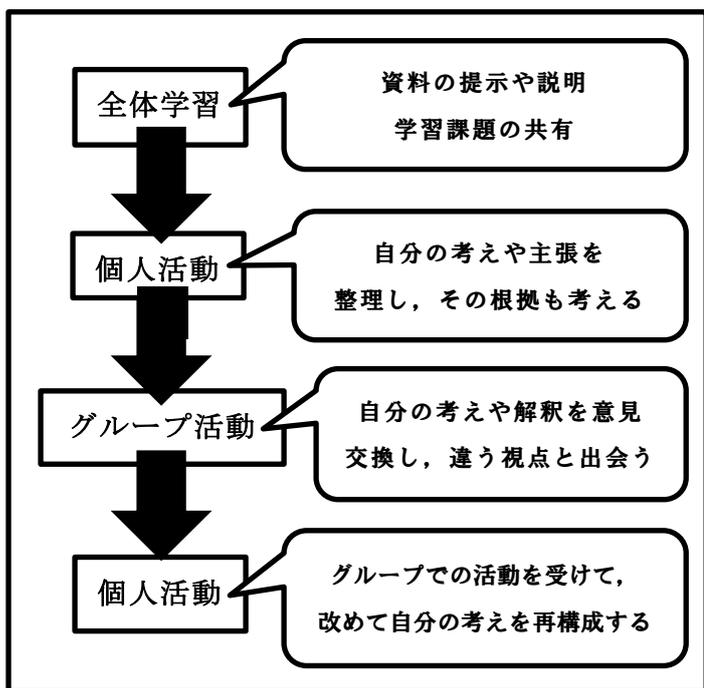


図4. 一授業の時間内における新たな気付きを得るための学習形態の工夫

一時間の授業の流れとして、まず初めに全体で今回の授業の学習課題の共有や、扱う資料の説明などを行う。次に、個人活動で自他

の考えとその理由や根拠を明確にさせる。

その後、その時個人活動で構築された生徒個々の考えや認識を生徒同士がグループ活動の中で意見交換を行い、多様な解釈や異なる視点に触れる。そして、最終的な個人活動で改めて自分の考えを再構築させる。

このような展開で授業を行うことで、歴史学習における新たな「気付き」が得られると考える。

(5) 資料読解をグループ活動で行う意義

個人で考えたことを確かなものにするだけでなく、他の人の意見や考えを聞くことで、新しい事実や意味・考えに気付いたり、新しい疑問や課題に出会ったりでき、その中で自分の考えや認識を練り上げ、再構築していくことができると考える。

さらには、物事は多面的に捉えることが重要であり、特に歴史学習において「歴史の解釈は一つではない」ことに気付く意味においても、資料を読み解く際に、自分とは異なる視点に気付くことは、個人での考えの客観性や正統性を高める手立てとなる。

したがって、グループ活動を授業の中に取り入れ、生徒同士の意見交換の中で資料を読解していくことによって、自分にはなかった考えや「新たな気付き」が得られると考える。

以上、これまで述べてきたことを踏まえて、次節からは筆者が今回実習で行った授業実践について検討していく。

5. 授業実践の実際

(1) ワークシートの分析1

図5、図6が授業実践の際のワークシートである。ワークシートは図5のような段階を意識した構成でワークシートを作成した。

この授業では、図6のように授業の展開部分で個人活動①→個人活動②→グループ活動→全体で共有→個人活動③という流れで進めることで、最終的に生徒の気付きにどのよう

な変化があり、どのような新しい考えが生まれ、気づきを得られたかが教師・生徒ともに一目で分かるような構成のワークシートを用いた。

「日本の選択! 開国か? 攘夷か?」

年 組 名 前 ()

<課題>
1853年、アメリカの東インド艦隊司令長官のペリーは浦賀に来航し、開国を求め大統領の国書を差し出して1年後に回答するように求めた。幕府はやむをえず国書を受け取ったが、筆頭老中の阿部正弘は対策を立てられず、迷っている。開国に応じるか、応じないか、老中の一人であるあなたはどのように判断しますか。

△開国・攘夷それぞれの立場でメリット・デメリットを整理しよう。

	メリット(利点)	デメリット(欠点)
要求に応じる(開国)		
要求に応じない(攘夷)		

個人活動①

図5. ワークシートの構成 (A)

△メリットとデメリットを整理した図から、あなたはどの立場を主張しますか。○で開国、また、なぜそう考えたかの理由も書こう!

個人活動②

他の人の意見を聞いて、自分の考えや違う主張を書いておこ

グループ活動

資料を見たりグループで意見を交換して、改めて自分はどう考える? ○で開国、また、なぜそう考えたかの理由も書こう。

個人活動③

⇒最後に活動を続けて、感じたこと・考えたことをまとめてみよう。

もし、開国しなかったら日本の歴史はどうなっていたらだろうか?

開国という日本の「選択」は正しかったのだろうか?

図6. ワークシートの構成 (B)

個人活動①…「アメリカ大統領の国書」の資料と「老中であつた阿部正弘が開国要求に対して非常に悩み、大名に意見を求めた」資料の2つ(図7, 8)を提示し、個人で「開国」と「攘夷」のメリット・デメリットを整理させた。

フィリモア大統領の国書の内容(要約)
「私の考えは、日米が交流するということだ。これは日本の利益にもなる。もちろんアメリカの利益にもなる。私はペリーに命じて、国王殿下にお話ししたい。合衆国の船は、毎年カリフォルニアから中国へ行くものが非常に多い。また捕鯨のため、アメリカ人が日本の海岸に近づくものも少なくない。もし日本の近海で船の難破など事故があつたときには、乗組員や所持品を救い、アメリカからの船が到着するまで、日本国で保護してくれることをお願いしたい。日本には石炭や食料が非常に多いことを我々は知っている。アメリカの蒸気船が、太平洋を横断する際には石炭を非常に使う。その石炭を運ぼうとすると不便極まりない。よって、蒸気船やその他の船舶の石炭や食料及び水を補給するために日本にアメリカ船が入港することを許可してくれることをお願いする。」

図7. 「アメリカ大統領の国書」の資料

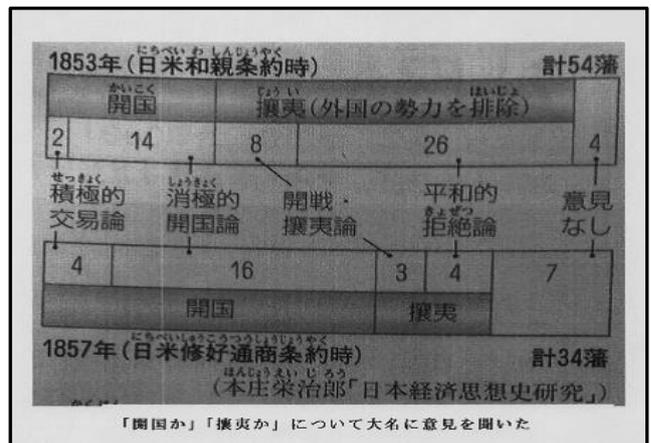


図8. 「老中であつた阿部正弘が開国要求に対して非常に悩み、大名に意見を求めた」資料

個人活動②…生徒に「開国」か「攘夷」かのどちらかの立場を選択させた。

メリット・デメリットを整理させる意図としては、資料を読み解く過程で自分の考えを構造化し、明確にすることがそれぞれの生徒の考えを確立していく上で重要だと考えたからである。そして、迷っている場合も含めて、どの立場を主張するか、そしてそう考えた理由について考えさせた。

グループ活動…教師側が「開国」と「攘夷」のそれぞれの葛藤する資料を提示した。

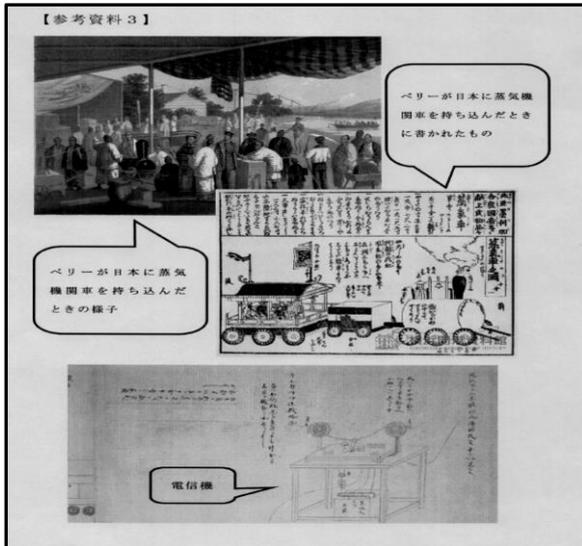


図9. 開国したことによるデメリットの資料

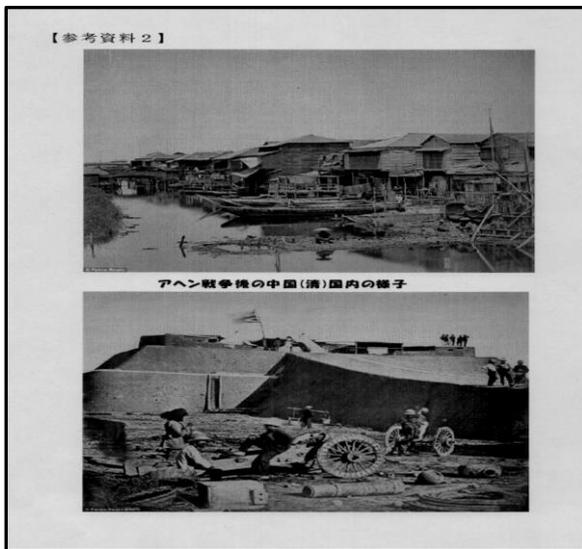


図10. 開国したことによるメリットの資料

ここでは、グループで意見交換をしながら、それぞれの生徒の考えを出しあい、それぞれの生徒の新たな考えや主張に気付くことや、自分と同じ考えでも違った視点で捉え直し、自分の考えや認識を再構築していくことをねらいとした。

グループ活動の際、グループでの意見をホワイトボードに書き出させた。その後、ホワイトボードを黒板に貼り、全体での共有化を図った。

個人活動③…グループ活動を経て、改めて自分の考えが変化したか、考えが深まったか

を見取ろうとした。その際、グループ活動で多くの意見を交流させ、多様な考えが出てくる中で自分にはなかった視点に「気付く」ことを意識した。

(2) ワークシートの分析2

ここからは具体的な生徒の記述から考察していく。ここでは、最初の主張した立場から、グループ活動を経て、その後の自分の主張が変わった生徒(A)と、変化はなかったが、新たな気付きが得られ、考えが補強された生徒(B)について取り上げる。

(I) 自分の主張が変わった生徒(A)

個人活動②の部分では、以下のような記述がみられた。

デメリットとデメリットを整理した図から、あなたはどの立場を主張しますか。
で開もう。 また、なぜそう考えたのか理由も書こう!

(A) 開国(要求に応じる) B. 攘夷(開国に応じない) C. その他(決っている)
 世界の情報を取り入れ、日本を発展させていくべきだと思うから。

個人活動②での記述

この生徒の場合は、初めは「開国」を主張している。その理由として、「世界の情報を取り入れ、日本を発展させていくべきだと思うから」と自分の考えに対して根拠を持って主張できていた。この段階で自分の主張が明確であると、グループ活動での新たな「気付き」が得られやすいと考える。

グループ活動の部分では、このような記述がみられた。

他の人の意見を聞いて、自分にはなかった考えや違う主張を書いておこう。

① 断って戦争になったら負けるかも... ② 問題がおきて国内でおさめられる。
 ・他国が困っているとき助けあげなければならぬ。

グループ活動での記述

グループ活動を行うにあたって、教師側が「開国」と「攘夷」のそれぞれの葛藤する資料を提示した。それをもとにしながら自分とは異なる立場の意見もまとめつつ、自分と同

じ考えの違った視点についても書いていることが分かる。この記述が次の**個人活動③**につながると考えられる。

個人活動③の部分では、以下のような記述がみられた。

資料を見たりグループで意見交換したりして、改めて自分はどう考える？

○で囲もう。

個人活動③での記述

A. 開国(要求に応じる) B. 攘夷(開国に応じない) C. その他(迷っている)

上のような変化から、この生徒は、グループ活動を通して、多くの解釈や立場を加味しながら、これまで持っていなかった考えに新しく「気付く」ことができたと考えられる。

その結果、当初明確だった主張が揺らぎ、異なる視点からこれまでの主張を見直すことでこの主張へ行き着いたと考えられる。

この生徒の授業を通じた感想では、授業でねらっていたことを表すような記述がみられた。

⇒最後に活動を終えて、感じたこと・考えたことをまとめてみよう。

最初は、貿易で利益が得られることや、他国の情報が入ることなど、メリットが多く、迷わずに開国すべきだと思いましたが、開国したことによって戦争が起きた中国の様子を見ると、開国にはいい気がしませんでした。しかし、開国したことで日本は発展していると思うので、当時の開国という選択は正しかったと思います。

もし、開国しなかったら日本の歴史はどうなっていたらいいだろうか？

授業を通じた感想の記述

開国という日本の「選択」は正しかったのだろうか？

振り返りの感想を見ていくと、この生徒は「最初はメリットが多く、迷わず開国すべきだ」と考えていたが、グループ活動で多様な考えに触れていく中で、「開国してはいけない気がしてきた」というような記述に変わっている。つまり、授業を通して、生徒(A)の意見がグループ活動で再構築され、新しい「気付き」が得られたと考えられる。

(II) 主張に変化はなかったが、新たな気付きが得られ、考えが補強された生徒(B)

個人活動②の部分では、このような記述がみられた。

▲メリットとデメリットを整理した図から、あなたはどの立場を主張しますか。

○で囲もう。 また、なぜそう考えたのか理由も書こう！

A. 開国(要求に応じる) B. 攘夷(開国に応じない) C. その他(迷っている)

アメリカ人に対して行なわなくてはならないことは多いが、断れば攻撃を受けた上で要求を飲まされ、支配を受ける危険性が高い。
また、メリットがないわけではないので、**個人活動②**での記述
圧倒的に不利な要求ならば極力話し合いがほしい。

この生徒は「アメリカ人に対して断れば攻撃を受けた上で要求を飲まされ、支配を受ける危険性が高い」と考え、「開国」を主張している。しかし、「極力話し合いを頑張る」という記述も見られたことから、この時点で異なる視点を持つことができていると考えられる。

グループ活動の部分では、以下のような記述がみられた。

他の人の意見を聞いて、自分にはなかった考えや違う主張を書いておこう。

開国 ・日本が発展する ・貿易ができる ・日本が明るくなる ・文化の取り入れ・新たな文化の発展	鎖国 ・被害が大きい ・外国人との交流 ・他国に勝てない	その他 ・どちらにも良い点・悪い点がある
---	---------------------------------------	-------------------------

グループ活動での記述

初めに主張した「開国」についてこの生徒は多くの新たな視点を得ることができ、さらに、異なる「攘夷」の立場についてもこれまで持っていなかった考えを記述することができている。このようなことから、この生徒にとってグループ活動を通して自分とは異なる認識や新しい「気付き」を得ることができたと考えられる。

個人活動③の部分では、以下のような記述がみられた。

資料を見たりグループで意見交換したりして、改めて自分はどう考える？

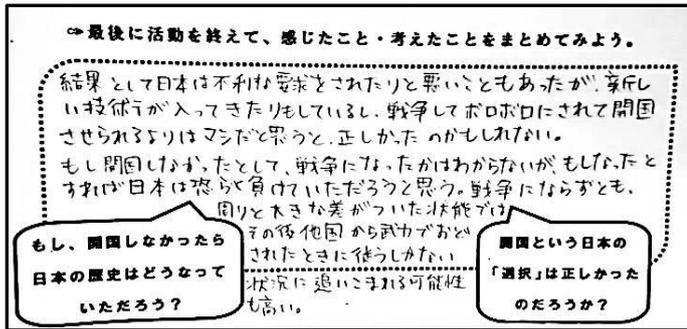
○で囲もう。

個人活動③での記述

A. 開国(要求に応じる) B. 攘夷(開国に応じない) C. その他(迷っている)

グループで出た意見をもとに、改めて考えを選ばせたが、この生徒の主張は変わらなかったことが分かる。しかし、同じ主張であっても、グループ活動を経た後の考えには何かしらの新しい「気付き」や視点が補強され、多くの意見を総合させたり、集約させたり、取り入れたりした結果として、この考えに辿

り着いたと思われる。それを表すような記述が授業を通した感想に書かれていた。



授業を通した感想の記述

ここでは、生徒(B)の「開国」の主張とそれとは異なる「攘夷」の主張の両方の考えが盛り込まれた記述になっている。「開国」という主張に対しても、「結果として日本は不利な要求をされたりと悪いこともあったが」というように当初の考えにはなかった違う角度から捉えることができ、生徒(B)の考えが補強されていることが読み取れる。また、「もし開国しなかったとして、戦争になったかわからないが、もしなつたとすればおそらく日本は負けていたと思う」という記述から、「攘夷」の立場に対しても生徒(B)自身の認識にはなかった新たな「気付き」が得られたと考えられる。

6. 成果と課題

本研究では、中学校歴史授業における新たな「気付き」に着目し、それを可能にする授業形態の工夫や必要な力について、生徒の記述したワークシートをもとに分析した。

成果として、生徒(A)、(B)の記述から、生徒たちはさまざまな資料を多面的・多角的に検討しあうことで、歴史の解釈は一つではなく、多くの視点から成り立っていることを学び、生徒同士でのグループ活動を通して新たな「気付き」が得られたことがうかがえる。

しかし、グループ学習に馴染めない生徒についてどのような手だてが取れるか、また、提示する資料をどのように精選していくかといったことが新たな課題として生じてきた。

また、本研究は本来、一時間の授業での成果だけでの取り組みではなく、一単元を通しての変化や長期的なスパンで見とっていくことが重要だと考えるが、それは来年度の課題としたい。

7. おわりに

生徒に資料を読解する力をつけさせ、歴史の解釈の多様性を理解させるとともに、グループ活動による資料読解を通して生徒が新たな気付きを得ることが出来る授業を創造することをねらいとして本研究テーマを設定して取り組んだ。しかし、振り返ってみるとそのための実践や分析は十分だったとは言えない。

今後の課題として、多くの授業経験を積む中で、生徒が歴史的事象を多面的・多角的に考え、広い視野で歴史を理解していくためには、どのような授業形態の工夫が可能であり、どのような資料が適切であるのかについて考えながら、よりよい歴史授業のあり方について模索し続けていきたい。

8. 参考・引用文献

- ・北俊夫(2005)『社会科における「読解力」向上の課題』教育展望 第51巻, 第4号, 教育調査研究所 p.23
- ・国立教育政策研究所(2008)『特定の課題に対する調査(社会)調査結果』中学校(歴史的分野) p.116
- ・文部科学省(2005)『読解力向上プログラム』
- ・文部科学省(2005)『読解力向上に関する指導資料 PISA 調査(読解力)の結果分析と改善の方向』
- ・文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版
- ・文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』東山書房
- ・山口修二(2013)『主体的に課題を追究させる社会科学習指導の在り方』鹿児島県総合教育センター長期研修報告書 pp.4~8.
- ・山梨の身近な地域の歴史を授業に生かす会 HP 『学習ナビゲーション』

<http://www.ypec.ed.jp/gakunavi/index.html>